

はじめに

2011年3月29日、米商務省核エネルギー安全保安部のリチャード・ストラトフォード部長が、モンゴルが使用済み核廃棄物の受け入れ先になれば、国家の枠組みを越えた使用済み燃料の貯蔵に弾みがつく。」と語っています。実際に音声聞いてみてください。http://www.youtube.com/watch?v=a0-TQhFA12E

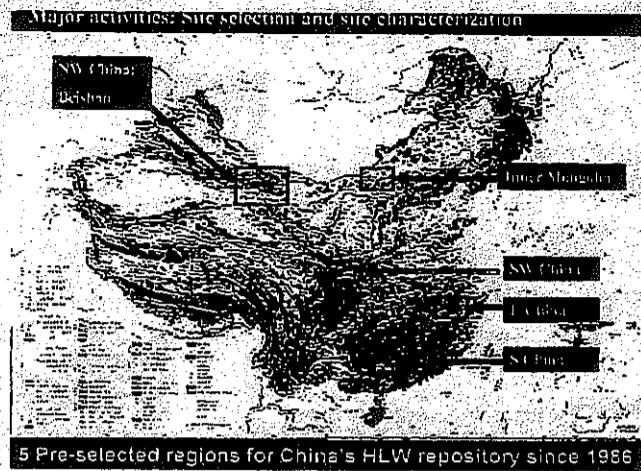
2011年5月6日の毎日新聞は「日米が核処分場 極秘計画 モンゴルに建設」というスクープを掲載しました。その後、7月18日に共同通信が英文の協定文書入手し、その要旨を報道したので、次の記事を読んでください。

合意文書原案の要旨

包括的燃料サービス (CFS) をめぐる日米、モンゴル3カ国政府の合意文書原案の要旨は次の通り。

- 一、気候変動やエネルギー安全保障、経済発展の試練に立ち向かうため地球規模での原子力の平和利用拡大を支持する。
- 一、2010年の核拡散防止条約 (NPT) 再検討会議が、核燃料サイクルの多国間アプローチを進展させる重要性を認めたことに留意する。
- 一、CFSが市場に行き渡ること、原子力利用の拡大が可能になる。
- 一、商業ベースのCFS確立を促すため定期協議し、活動を調整する。
- 一、CFS構想に対して起こり得る世論の反応について検討する。
- 一、モンゴルでの使用済み燃料貯蔵施設の造成をめぐる、モンゴルに技術協力する可能性を国際原子力機関 (IAEA) と協議する。
- 一、(米国が推進する) 原子力損害補完的補償条約 (CSC) に基づき、原子力賠償の国際的枠組みを構築し、CFSに加わる可能性のある国に参加を促す。

図1は、中国核工業集団の資料で、核廃棄物処分場予定地を示しています。モンゴル国の国境からすぐ南部の新疆ウイグル自治区と内モンゴル自治区のゴビ地方に核廃棄物処分場の建設が予定されています。



http://nautilus.org/wp-content/uploads/2013/08/China\_Zhou\_May-28th-2013-version-2.pdf

2013年3月9日にNHKBS1で放送された「原子力 バックエンド最前線〜イギリスから福島へ〜」という番組の中で、イギリスのバックエンドに取り組むリーダーが、この地図を見て「イギリスにもゴビ砂漠のようなところがあればいいのに」と言います。

人口密度の少ない地方に原発を建設してきたように、命の存在をイメージしにくい砂漠に核廃棄物を埋めたらいいと考えるのでしょうか？そもそも、核廃棄物の埋蔵処分をするための基礎研究は充分行なわれてきたのでしょうか？みなさんはどう思いますか？ここでは、埋めたらいいと言われたゴビ地方の側から、そこで行なわれてきた遊牧の原理、そこに持ち込んだ核エネルギー関連の計画、そこで起こったウラン鉱毒事件を考える材料として紹介します。

1. 遊牧の原理

西は北アフリカから東アジアまで横たわる乾燥ステップベルト地帯、モンゴル国はその東端に位置し、遊牧という移動式牧畜が行なわれてきました。今も遊牧はモンゴルの基幹産業となっていますが、それなぜでしょうか？

<乾燥と寒冷な気候> モンゴルのほぼ中央にある首都ウランバートルの気候因子を例にとってみましょう。ウランバートルは北海道の稚内市とはほぼ同じ緯度に位置し、標高は1,351mの高さで、太平洋から離れること2,400kmです。このため乾燥度は高く、年間降水量は233mm、年平均気温は0.4℃、最高34.5℃、最低-38.6℃と気温の年較差は非常に大きくなります。

<草の生育に適した気候> この乾燥と寒冷さは農耕の発展には不利な気候条件です。しかし、草ならば、1日の平均気温が5℃以上で生育し、その期間中に200~300ミリの水分があれば育ちます。モンゴルでは平均気温5℃以上の日数は年間約120から180日、この期間中に年間降水量の9割が集中します。家畜を通じて自然の草資源を利用し、畜産物を生産する移動式牧畜、遊牧がモンゴル高原に生業として定着するようになりました。

<多様で広大な牧地> モンゴルの大地は、北氷洋からシベリアをつたわって南下する湿気によって潤されるため、降水量は北から南に向かって少なくなります。これにともない、植生は北から、森林、ハンガイ (森林草原)、平原、ゴビ (砂漠性草原)、砂漠と変化します。遊牧の土台となる牧地は国土の4分の3を占めます。ハンガイ、平原、ゴビという3つのタイプの草原が、日本列島3つ分あります。憲法で国有財産として守られ、モンゴルの国民は誰でも家畜を放牧することができます。

<多種類の牧草と家畜の嗜好> モンゴル高原に生育する植物2023種のうち、家畜が食べる牧草は550種以上を占めます。主な牧草は、イネ科、ガマ科、ユリ科、キク科、アヤメ科、アカザ科の牧草です。家畜は草であればいつでも、どんな状態でも食べるわけではありません。例えば、キク科の牧草は春の終わりから夏にかけて開花する時期に強い臭いを出すので、家畜は嫌いますが、花が枯れる秋頃に食べます。背の高い牧草は牛が食べ、その後を羊や山羊を放牧するとちょうど食べやすい高さの牧草になります。灌木や喬木類は硬いですが、らくだが好んで食べるので、他の家畜と牧地が重なりません。

<五畜と畜産物> この牧地に放たれる家畜は約3273万頭 (2010年末統計)。種類別に見ると、ラクダ (27万頭)、馬 (192万頭)、牛 (218万頭)、羊 (1,448万頭)、山羊 (1,388万頭) と五種類の家畜がいます。遊牧民は、すべての家畜の肉を食べ、羊をのぞく四畜は搾乳し、乳製品を作り、冬の保存食も作ります。羊毛はゲルという移動式住居の覆いとなる巨大なフェルトの原料になり、らくだの毛はキャメルウール、山羊のうぶ毛はカシミヤという高価な商品作物となり、馬のしっぽの毛は弦楽器、山羊皮や牛皮、その他の家畜も毛皮として販売することができます。

<牧草と家畜の四季の変化> 秋を過ぎるとどの家畜も痩せ始め、マイナス30℃に達する冬、家畜は体力を消耗し、春には夏の体重の2割から3割失います。そのため遊牧民は夏から秋の季節には、半年間過ごす冬营地周辺の放牧地の草を守るため、できるだけ冬营地から離れたところに夏营地を置きます。また秋营地では家畜が少しでも太るよう可消化タンパク質の多い草を求めて短期間の移動を行います。遊牧というと、水と草を求めてさまよおうと思われがちですが、冬营地の草資源を守るために、住む家ごと移動するのが遊牧です。モンゴルで定住型の牧畜ではなく、移動型の牧畜が行われるのは、この気候と牧地牧草の四季の変化にあります。

<草を脂肪酸やタンパク質に変える胃袋の中の微生物>

家畜は草食動物ですが、なぜ草を食べて太ることができるのでしょうか？それは、羊や山羊、牛は胃袋が4つ、ラクダは3つある反すう動物だからです。第一胃のルーメンには兆という単位を越える数えきれない細菌と原生動物が住んでいます。これらの微生物は、牧草の主成分のセルロースや炭水化物を分解する酵素を持ち、発酵分解して酢酸や酪酸などの揮発性脂肪酸を作ります。これがルーメンの壁から吸収され、血液を通して組織に送られ、エネルギーとして利用されます。また、この微生物は死ぬと分解されますが、その体は良質のタンパク質からできていて、第二から第四の胃で吸収されます。このように草を食べて太るのは、お腹に微生物を飼う反すう動物だからです。

<エネルギーと物質の循環>

太陽のエネルギーは草を育てます。家畜はその草を食べ、草は胃袋の中で微生物を育てます。脂肪酸はエネルギーに、タンパク質は肉や乳、毛や皮などの畜産物になります。遊牧民はこの畜産物で衣食住を満たします。草の最終廃棄物となる糞は、1年間乾燥させると繊維だけが残ります。遊牧民はそれを燃料

として使います。燃料にならなかった糞は、土壌の微生物によって分解され、牧草を育てる栄養になります。

このように太陽からエネルギーを受け、大地の微生物・牧地牧草・家畜・ルーメンの微生物・人間の間に命、死、命の再生産が繰り返される循環が遊牧の原理です。これがモンゴルでは今も生きています。

#### <遊牧民の人口>

2010年現在、モンゴルの人口は278万人です。モンゴルで遊牧をになう成人人口は33万人です。遊牧は家族単位の労働ですから、実際に家畜にかかわる人口はさらに多くなります。モンゴルは未成年の人口が多いため、経済活動が可能な人口が115万人、3人に1人の成人が遊牧民ということになります。職種別人口では遊牧民が最も多く、次に多いのは車両整備士15万人弱、教員が9万人弱、運輸が8万人弱、工業が6万4千人、国家公務員が6万1千人、医療関係者が4万人、鉱山労働者は3万4千人です。

#### <社会主義時代の遊牧社会>

1921年の人民革命の後、ソ連に次ぐ2番目の社会主義国となったモンゴルは、伝統的な遊牧を集約化し、社会主義経済の基盤としました。遊牧民は私有家畜をネグデル（農牧業協同組合）に投資して組合員となり、ネグデルは組合員に共有家畜を貸与し、畜産物の生産課題を与えました。また、組合員は畜産物を国家調達としてネグデルに納め、月給をもらう労働者になり、ネグデルは組合員に井戸や畜舎の建設、冬の飼料栽培や獣医療サービスなどを提供しました。国は郡の中心地にネグデルの管理棟の他、学校、生徒寮、病院、郵便局、購買部、公民館、発電所など公共施設を建設しました。干ばつや雪害などの自然災害が起こると、被災地のネグデル長は、避難地のネグデル長と話しあい、必要な飼料を選び、協力しあいました。遊牧民の生活と労働は1992年までこのネグデルのシステムの中にあつた。

#### <資本主義以降の遊牧社会>

ソ連・東欧の民主化の風を受け、モンゴルは、1990年の春に民主化運動が高揚し、一党独裁を放棄し、1991年にIMFの指導によるショック療法に従い、市場経済へ移行することになりました。国営企業の急激な民営化は、倒産による失業者・失業者を生み出しました。さきほど職種別人口を見ましたが、工業部門が極端に少なくなりました。一方、ネグデルも一斉に解体されましたが、私有財産と家族経営を基盤とする遊牧民個人経営が生まれました。ネグデルに変わ

る全国組織はできていませんが、伝統的な共同体の相互扶助を復活させて、小さな地域社会を営んでいます。

遊牧民の数は、1991年に25万人でしたが、2010年で33万人と増えています。生産と生活の手段である家畜を手にした遊牧民は、ますます仕事に力を入れ、家畜を増やして行きます。家畜数は1991年に2552万頭でしたが、2010年には3273万頭に達しています。遊牧民は、家畜を増やすことで、物質的な豊かさを手にしてきました。2010年の統計では、遊牧民戸数は16万戸ですが、その内、太陽光発電などの原動機を持って電化している牧家は、13万戸以上、テレビは12万戸が所有しています。車は4万7千戸、つまり4戸に1戸が持ち、畜産物を運んで販売することも取り組んでいます。

このように、モンゴル国において、遊牧は自然の特質にあつた生産のあり方であり、社会主義時代も、資本主義時代も、国民の食糧と工業の原料を生み出す基幹産業として存在しています。

#### 2. ゴビ地方のウラン鉱山開発・原子力発電所建設・核廃棄物処分場建設

ゴビ砂漠には、密度は低いですが草が生えているので家畜を放牧し、井戸を頼りに遊牧民は暮らしています。山羊やラクダを飼う遊牧民は現金収入が多いです。2013年の冬、カシミヤは2013年10月に最高値1キロ83,000トゥグルクがつかれました。労働者の平均月給が約700,000トゥグルクですから、これはカシミヤ8.4キロ分にあたります。山羊3頭から1キロのカシミヤが採れるので、わずか25頭の山羊を飼えば、平均賃金分の収入となります。普通の牧家で200から300頭、多い人では1000頭の山羊を飼っています。さらに肉やミルクを食用に、毛皮は売ることでも利用できます。ゴビは、自然環境は厳しいけれども、不毛の大地ではなく、人が文化的、経済的に豊かな暮らしができる場所なのです。

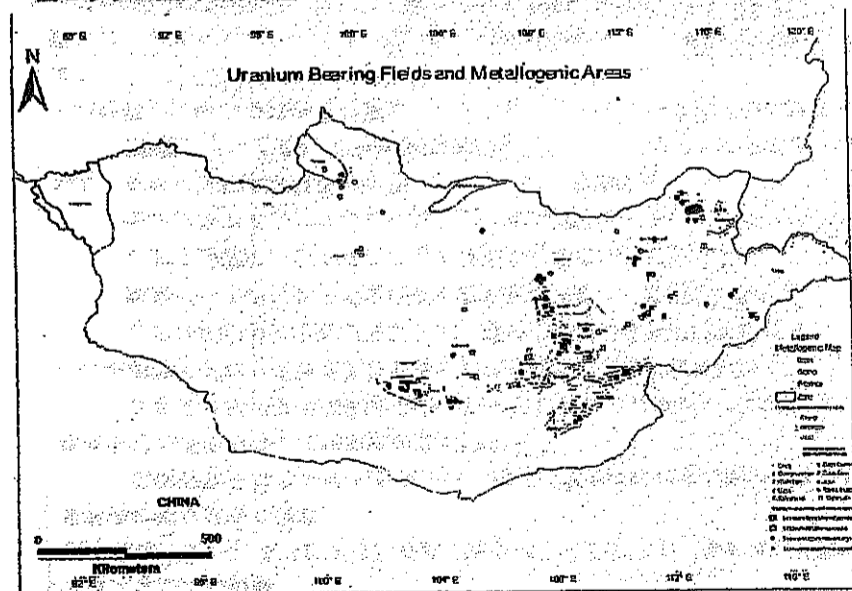
このゴビ地方で、今、地下資源の大規模な開発が行われています。

市場経済移行後、モンゴル政府は1994年に鉱物資源法を制定し、国際資本の投資を可能にして、1997年に鉱業法を制定し、国際資本に探査権や採掘権を認め、地下資源開発の法的環境を整えました。2009年の-1.3%というマイナス成長から構造改革を進め、2010年の経済成長率は6.4%、2011年は17.5%、2012年は12.3%と好調が続いています。2005年以降、鉱業がGDPに占める割合が農牧業を上回って第一位となり、2012年の農牧業の対GDPが14.8%であるのに対し、鉱工業は18.6%となっています。

ゴビ地方の地下資源の代表的なものは、石炭、銅、ウラン、レアアースなどです。特に、ここではウランに注目します。

モンゴル政府は市場経済移行後、ウラン鉱山開発、核エネルギー利用、核燃料サイクル、核廃棄物処分に取り組んできました。

図2 ウラン鉱山の分布図



出典：  
[http://www.iaea.org/NuclearPower/Downloads/Technology/meetings/2011-Oct-3-6-SMR-TM/3-Wednesday/5\\_MONGOLIA\\_Tsuren\\_TM3-60ct2011.pdf](http://www.iaea.org/NuclearPower/Downloads/Technology/meetings/2011-Oct-3-6-SMR-TM/3-Wednesday/5_MONGOLIA_Tsuren_TM3-60ct2011.pdf)

<ウラン鉱山開発> 1980年代にソ連がドルノド県に鉱山労働者の村マルガイを建設し、周辺のウラン鉱山を開発し、鉄道を敷き、ウラン鉱石を東シベリアのクラスノヤルスクに運び、濃縮しました。市場経済移行後は、ロシアに加えて、カナダや中国、フランス資本の会社、モンゴルとの合弁会社がウランの試掘をするようになりました。日本は、小泉内閣の時代、鉱物資源開発を進めるための「総合的パートナーシップ」の協定を締結しました。最近では、2013年10月26日にフランスのアレバと三菱商事がモンゴルのウラン鉱山開発に関す

る合意文書に調印し、ドルノゴビ県のオラン・バドラフ郡で6万トンのウランを採掘することになりました。来年の春には、ドルノド県とドンドゴビ県にある戦略的ウラン鉱山3つの開発に着手します。現政権の民主党政府は、将来イェローケーキを生産し、輸出することを着々と進めています。

<核エネルギー開発>日本との関係では、2006年、小泉首相がモンゴルを訪問し、核エネルギーの専門家養成のため留学生の受け入れが決まりました。また、東京工業大学革新的原子力研究センターはモンゴルに小型原子炉の導入に関する研究教育の支援を行ない、アジアの原子力導入のモデルにしたいと取り組んでいます。

2008年の「モンゴルミレニアム開発目標」には、2008年から2021年のモンゴルの総合的国家開発戦略の中に「核エネルギーの平和利用の開発は、モンゴルの持続的発展に重要なファクターである。」と位置づけ、2008年から2012年の政府の行動計画には「原子力発電所開発の技術と経済性についての総合的な研究と、放射線管理と安全性の強化を実施する」と明記しました。今日でも、このミレニアム計画が核エネルギー推進の根拠となっています。

2011年10月のIAEAの会議に出席したモンゴル地下資源エネルギー省と核エネルギー庁が「モンゴルの核エネルギー政策の現状と将来構想」という報告の中で、2010年から中型の原子力発電所を南ゴビ県に建設する研究、100-200MW原子力発電所を西部に建設する研究することを報告しました。

[http://www.iaea.org/NuclearPower/Downloads/Technology/meetings/2011-Oct-3-6-SMR-TM/3-Wednesday/5\\_MONGOLIA\\_Tsuren\\_TM3-60ct2011.pdf](http://www.iaea.org/NuclearPower/Downloads/Technology/meetings/2011-Oct-3-6-SMR-TM/3-Wednesday/5_MONGOLIA_Tsuren_TM3-60ct2011.pdf)

<核燃料サイクルの推進母体>2007年、アメリカは「モンゴルアメリカ科学研究センター」をウランバートルに設立し、核燃料サイクル計画の推進母体を作りました。2008年にアメリカの大学で核燃料サイクルの専門家として教鞭をとっていたオンドラー教授を呼び戻し、「モンアメセンター」の役員として、S. オユン外務大臣の相談役につけました。S. オユンはのちにモンアメセンターの代表になり、現在の環境大臣です。2010年オンドラーは、外務省特任大使となり、核関連の問題の窓口になります。毎日新聞の会川記者とも情報交換します。2011年3月、東京大学の田中知教授らは、モンゴルを訪問した時、「モンゴル原子力イニシアチブ」があり、ウラン採掘だけでなく、濃縮、燃料加工、使用済み燃料の中間貯蔵への参画を望んでいると報告書にまとめています。3月11日、京都で行われた東大主催の「核燃料サイクルの国際化」という会議で、

モンアメの若手研究員がモンゴル代表として参加し、「核廃棄物の引き受け条件は、モンゴルで生産した燃料であること」と述べました。

<法的環境>モンゴルでは「モンゴル・ウラン・イニシアチブ」と呼ばれていますが、2008年に政府直属の各エネルギー庁の人員を増加して頃から始まります。2009年にはロシアの国営企業ロスアトムとの協力協定の中にウラン鉱山開発と中小型原子炉建設が合意され、プーチン大統領がモンゴルに訪問して、ウラン探査と核エネルギー利用に関する二国間の覚書をかわします。その後、モンゴルは「放射性物質と核エネルギーの開発に関するモンゴルの国家政策」を国会で採決し、バヤル首相が日本を訪問し、「核エネルギー及びウラン資源に関する協力覚書」を交わします。同日中に、モンゴルは核エネルギー法を制定し、その後「核エネルギーに関する国家政策実施プログラム」を採択します。インド、中国、フランス、アメリカ、韓国とウラン開発と核エネルギー利用に関する二国間協定を締結していきます。

<核廃棄物処分場建設>毎日新聞のスクープで、モンゴルでは反核運動が大きな盛り上がりを見せました。5月にバトbold人民党首相は、「投資計画書 2012-2017年」の案をまとめ、そこにドルノゴビ県ダランジャルガラン郡とドルノド県マルダイ村に放射性廃棄物保管、加工、埋蔵施設建設の予算がつけられました。閣議決定された予算では、同じ予算、同じ場所に放射線測定施設建設と書かれていました。9月22日にエルベクドルジ大統領は、国連総会で「モンゴルに核廃棄物を入れてはならない」と演説しました。しかし、同日、IAEA総会に出席したエンフサイハンは「It is well aware that exploitation of uranium would pose a number of challenge including ensuring physical security of nuclear material at all stages of nuclear fuel cycle, including waste disposal. つまり、核廃棄物問題も含めて、モンゴルは核エネルギー利用にチャレンジしていく姿勢を示す報告をしたのでした。

<ゴビにウラン鉱山開発と原発建設?>毎日新聞の会川晴之記者は、モンゴルの原子力開発計画のトップであるチャドラー博士にインタビューし、モンゴルが核廃棄物処分場を受け入れる代わりに原発を建設する候補地としてドルノゴビ県のバヤンタル郡などの地名をあげています。いずれもゴビ地方にあり、地下水以外に水源のない地域です。

9

### 3. アレバ系コジェ・ゴビ社のウラン鉱山開発と家畜の異常死問題

2013年の春、ドルノゴビ県オラン・バドラフ郡で2つの頭をもつ仔山羊が生まれました。119戸の牧家から700頭以上の家畜が異常死しました。

家畜の大量死とウラン鉱山の因果関係については、まだわからないことがあります。授業でお話する時にはもっと詳細がわかっているのではないかと思います。このテキストでは、モンゴルで公開された資料を時系列にそって整理します。みなさんは、これを読みながら、リテラシーの力をつけるべく、問題点をピックアップしたり、調べたりして、授業の当日に質問をしてください。

2010年12月から2011年5月にかけて、ドルノゴビ県オラン・バドラフ郡のドラーン・オール鉱山でフランスのアレバ社が70%出資をして設立したコジェ・ゴビ社がウランを試験採掘していました。ここでは、イン・シチュ・リーチング法（ISL法）というウランを化学物質の入った水溶液で溶かして吸い上げる方法を試みしていました。

モンゴル政府が特定したウランの戦略的鉱山は、規模の大きいドルノド県のドルノド鉱床、ゴルバンボラク鉱床、マルダイ鉱床の3つ、このドラーン・オール鉱山は含まれていません。しかし、2013年度予算案にはアルタンホイグ首相直轄の予算として「第6プログラム 放射性鉱物資源と核エネルギー」という項目があり、ドラーン・オール鉱山のウラン採掘工場建設について特記されました。実際には、この予算は削除されましたが、政府が重点的に開発しようとしている鉱山で鉱毒事件が起こったのです。

2012年12月26日、牧民ノルスレンは仔牛が死んでいるのに気づきました。そこは、コジェ・ゴビ社のウラン採掘地から6キロの地点。彼は1977年からこの地で家畜を飼い、国から表彰されるほど優秀な遊牧民でした。

12月28日、核エネルギー庁とNGOが現地調査に行きましたが、コジェ・ゴビ社がすでに死んだ仔牛を焼却していました。しかし、その後もノルスレン家の仔牛は死に、1月末までに22頭死にました。死んだ家畜の内蔵は、肺や胃、肝臓に腫れ物ができたり、黒い斑点ができたりしていました。

3月11日、家畜繁殖研究所が、重金属と放射性物質が原因であると調査結果を報告しました。

3月25日のウネン紙は「ウランの放射能が原因で家畜が死亡。牧民を緊急避難させることに決定」と報道しました。

10

3月26日、核エネルギー庁は、「今も総合的な調査をしている最中であるにもかかわらず、結論が出たかのように公表し、現地では移住を始めた人がいるというのは遺憾だ」と家畜繁殖所の結論を否定しました。遊牧民は安全な場所に避難する権利を奪われることになりました。

4月中旬、アルタンホイグ首相が、ドルノゴビ県で行われた会議に出席した時、牧民ノルスレンは直接被害を訴えました。首相は、総合的な調査をし、原因究明しているところであり、また、民主党として、大地を汚染することのないクリーンなイエローケーキを取り出して、輸出する政策には変わりない、と答えました。

5月1日、6ヶ月かけて、のべ100人の専門家が参加し、9千万トウグルクを支出して行った政府の調査の報告を、アルタンホイグ首相は牧民ノルスレンの前で読み上げました。仔牛の死亡の原因が「ウランではない」「伝染病ではない」「銅とセレンとアンチモンが疑わしい」と聞いて、牧民ノルスレンは「ウラン鉱山で銅が原因とはどういうことだ?」と納得しませんでした。首相は、国際的な研究協力をえて、調査を継続すると言って幕をひきました。

5月13日、自然保護団体や反核運動のグループが、ドルノゴビ県で現地調査を行い、牧民ノルスレン家以外の牧民家庭にも異常出産が起こっていると報告しました。

5月28日、ドルノゴビ県の牧民や市民がウランパトルに来て、「政府がウランは原因ではないと言っても、私たちは100%ウランのせいだと思っている。」と記者会見を行いました。

牧民ハンサルマーは21戸の家畜の異常出産のリストを読み上げました。

目のない仔山羊・仔らくだ、1つ目の仔馬、唇のない仔山羊、あごのない仔馬、首のない仔山羊、頭のない仔羊、2つ頭の仔羊、仔馬、四角い頭の仔羊、3本足の仔牛、仔山羊、前足のない仔山羊、前足が立たない仔羊、寝たままの仔らくだ、2つ頭の仔羊、仔馬、四角い頭の仔羊、3本足の仔牛、仔山羊、前足のない仔山羊、前足が立たない仔羊、寝たままの仔らくだ。

牧民ハンサルマーは「今、2つ頭の仔羊が生まれています。この状態を放置し、私たちから2つ頭の子どもが生まれて、それを見て初めて信用するのですか」と訴えました。

市民エルデネバットは、最初は、ウランは有害じゃないと言って、若者を働かせました。コジェ・ゴビ社が採掘した2、3年の間、そこで働いた若い人た

ちはたくさんいます。最近、「やせた」、「毛が抜けた」、「目が赤い」、「皮膚がかゆく夜眠れない」と訴えています。

5月31日、オラン・バドラフ郡の牧民ガントゥルは1500筆の署名をエルベクドルジ大統領に渡しました。

7月31日、アレバ社とコジェ・ゴビ社は、オラン・バドラフ郡の牧民や市民に対し、説明会を開きました。人々は納得せず、また、試験の再開に対して反対の意志を明らかにしました。コジェ・ゴビ社は一旦重機を撤退させました。

10月26日、フランス、日本、モンゴル三国は、家畜の異常死の原因がわからないドルノゴビ県オラン・バドラフ郡でウランを採掘する合意文書に調印しました。このニュースを見て、政府はウラン鉱毒をなかつたことにし、核エネルギー開発を進めるのではないかとショックを受ける市民が増えました。FacebookのアイコンにNo Nukesの黄色いたすきをかける人が急増していきます。

10月29日、S.オユン環境大臣は新聞記者のインタビューに対し「ウランを掘っても、人間にマイナスの影響はない。」「オラン・バドラフ郡はもともとセレンが多く、家畜は虚弱であった」と言いました。この発言に失望する人がさらに増えました。

11月13日、アルタンホイグ首相は、「核廃棄物を受け入れはしない。」「ドルノゴビの家畜の原因はセレンである。」と断定しました。国際的な研究協力により、原因を明らかにすることなく、首相は原因をセレンであると断定しました。

おわりに

遊牧と同じく、農業も、漁業も、太陽のエネルギーを源とし、人類が育ててきた産業です。日本では農村や漁村に原子力発電所を建設し、都市工業地帯でその電気を使ってきました。私たちは自分たちの生み出した核廃棄物をどうすべきでしょうか? さらに人口の少ないゴビ砂漠に埋めたら、解決するのでしょうか?